

〔法学新報〕第一〇〇号 明治三十二年七月二十日〕

○卒業生総代の答辞

今茲ニ吾法学院長自ラ臨テ吾等百八十有余名ノ為メニ卒業証書  
授与ノ式ヲ挙行セラレ朝野貴紳ノ臨席ヲ仰キ懇篤ナル訓辞ヲ賜  
ハル余輩ノ光榮何ゾ是ニ加ヘン顧ミレハ既ニ三星霜ノ以前ナリ  
吾等少年ハ葉舟ヲ法海ニ浮ヘテ一港ヲ出帆セリコレ実ニ余輩航  
行ノ第一段階ナリキ雲霧ハ前路ヲ包テ方面ヲ隠シ怒濤ハ山ヲ捲  
テ進行ヲ妨止セリ加フルニ余輩ノ無經驗ハ軸櫓機関ノ運転ヲ自  
由ナラシムル能ハサリキ幸ニ嚴肅父ノ如キ院長幹事ノ有ルアリ  
テ灯台ニ点火シテ其目標ヲ指示シ慈愛母ノ如キ講師ノアルアリ  
テ自ラ羅針盤トナリテ其進路ヲ指揮セリ余輩ハ此指揮ト保護ト  
ヲ受ケテ漸ク其航路ヲ進メ年ヲ数フルコト三度ニシテ茲ニ一碇

泊港ニ到達スルヲ得タリ想フニ歳々年々法海ニ航行ヲ企ツル者  
千ヲ以テ算フ可シ各自其目的トスル所ノ港ハ抑々如何ナル場所  
ナル乎聞ク万法各其極アリ其道ニ通スレハ則其極ニ達ス極是ヲ  
樂園ト云フト法律学ノ樂園ハ蓋余輩ノ所謂目的港コレナリ夫法  
海ハ広遠渺々トシテ其樂園ニ達スルコト決シテ易々タルモノニ  
アラス況ヤ其航行ノ間ニ於テ旋風破浪妨害ヲ試ムルモノアルオ  
ヤ余輩ノ胸中予メ是ニ備フルノ策ヲ貯ヘサル可ラス院長閣下ノ  
訓誨其意蓋茲ニアルヲ知ル余輩今此碇泊港ヲ去テ航行ヲ更新ス  
ルニ方リ今日ノ光榮ヲ忘ル、コトナク此金言ヲ銘肝服膺シテ樂  
園ニ達センコトヲ謀ル可シ聊々蕪辭ヲ陳シテ答辭ニ代フ

明治三十二年七月十二日 東京法学院卒業生総代

邦語科生 川瀬榮太郎